
狩る話

水桐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狩る話

【Nコード】

N1910U

【作者名】

水桐

【あらすじ】

グレイスが目の敵としているイビルジョーを狩りに行くお話。

(前書き)

前のやつ続きという続きでもないです。

オリキャラ(というか実際使ってるモンハンキャラ)のお話、ブログに載せてるキャラ設定見ると多少は分かるかもだけどほぼ自己満足で書いたものなので身内以外は分からない事ばかりかと。

ちなみにリリィ・厭魅・ヨダカ・女、グレイス・男になっております、本当にこんなパーティーだから仕方ない他意は本当に無い↑

※良いパーティー構成など作中で言ってる事が正しいとは限りません、むしろ私の偏見なので間違ってる可能性大です。

その誘いは突然だった。グレイスが一から始めたハンター生活で初めて四人揃った狩りを一通り終えた後、クエスト受注所で様々な受注届を見ていたリリイがぱつと振り向き「今度はこのクエストやろうか？」と見せた。その受注届をよく見てみるとその紙に書かれていたのは“恐暴竜一頭の討伐”の文字。一瞬間が強張りかけたが他の二人に気付かれることは無かったようだった。ただ一人、ヨダカを除いては。

「大丈夫？」

狩猟場所である孤島へ向かう途中、リリイと厭魅が近くにいないのを見計らってかヨダカがそつと聞いてきた。一人黙々と武器を研いでいた真っ最中だったので気配も感じなかったその声の主に肩をびくつかせ驚く。

「あ、ああ…何がだ？」

「ジョーのこと。」

「ああ…まあ、四人だし、何とかいけるだろ。」

「そう言うこと聞いてるんじゃない。」

ずい、とヨダカが迫る。対照的にグレイスは気押されるように背を反らす。ヨダカの短い銀髪が太陽の光を反射した。

「……………」

何を言わずとも目で訴えてくるその感情に気付いたグレイスは少しの間目を伏せる。そしてふっと笑いアームを外した手でがしとヨダカの頭を撫でた。むう、という表情で何かを言おうと口を開きかけたヨダカを手のひらで制す。

「だーいじょうぶ。」

そう言ってへらりと笑ったその顔は、やはり少しだけ無理をしていたように見えた。

そうこうしている間に孤島へと辿りついた四人は別々の場所へと船から下ろされる。最初から地図があるわけではないので正直に言うところ何処なのかはよく分からないが、今まで何度も来たことのあるので感覚で覚えている地形だけを頼りに合流と恐暴竜の発見を目的にグレイスはゆっくりと辺りを見回す。

動く前にと獲物にぶつけるためのペイントボールを確認していた時、何かの咆哮が聞こえた。それと同時に何かを引きずる音、木を踏みつぶす音。このエリアではない、しかし遠くもない何処かに奴がいると直感的に判断した。

湧きあがる激情を無理矢理に押さえつけて大きな音をたてないように注意しながら、それでも足早に崖の間を走りぬける。狭いその隙間を抜けたその先に、奴はいた。

てらてらと黒緑に鈍く光る巨体、太い尾、大きく裂けた口、忌々しいその姿を誰が忘れようか。目の前にはアプトノスの肉を引き裂き喰らいつく“恐暴竜イビルジョー”がいた。

「……………」

此方の存在に気付かず食事を続けるイビルジョーの背後からグレイスは静かに、しかし滲みだす怒りはそのままに歩み寄る。見上げるほど近くなったその時、思いきり投げつけたペイントボールが破裂した。すぐさま辺りに刺激臭が漂い始める。その異変にやっと気付いたイビルジョーがこちらを振り向いたのと同時にグレイスは無意識に、その口角を歪めた。それが興奮によるものなのか追い求めてきた復讐の相手と合い見えたからなのかは分からない。

シルバーソルシリーズの装備による眩しさの所為か、人間を見た物珍しさか分からないがイビルジョーはその小さな目で2、3度瞬きする。その後、低く唸りながらやっとその巨体を反転させ重い足音を響かせ此方を向いた。

グレイスが背負った太刀、王牙刀【伏雷】をゆっくりと引き抜くと刀身に走る電流がパリパリと音を立てる。ペイントボールによる

匂いで既にパーティーメンバーは此処に集まりつつあるはずだったが、今グレイスはそのことなど毛頭頭に無かった。外面は冷静すぎるほどに冷静だったが、その内面は湧きあがる怒りや闘争心で煮え滾っていたのだ。

黒い巨体が耳障りな声で一つ咆哮すると同時に強張る身体を無理矢理に動かし走る。目前へ迫った古傷の残るその身体へと、迷わず刃を突き立てた。

「…ス…グレイス！グレイス！！！」

誰かが自分を呼ぶ声が聞こえて踏み出そうとした足が一瞬竦み、立ち止まる。誰だ、と聞こえた方向へ目を向けようとしたその瞬間視界の端に黒く大きなものが映った。それが尻尾であったのかただの巨体であるのかを認識する前に凄まじい衝撃と痛みが走り、身体が驚くほど高い宙を舞っていた。その身体はすぐに地面に、しかも不運なことに土ではなく岩の上に叩きつけられる。

「…ッは！……ぐあ、う…っ！」

いきなりのことに受け身も何も取れなかったので全身を強かに打ちつけたらしく、上手く息ができなくなる。動けない。十分に吸えない酸素の所為か涙が滲む目を開けると太刀は手の届かない位置に弾き飛ばされていた。

奴は、と思い辺りを見渡そうと頭を上げようとすると背中に、いや全体に恐ろしい程の力が加わった。意識が飛びそうな程の衝撃に耐え、押し掛かる何かへ力を振り絞り目を向ける。そこには勝ち誇ったかのような目をしたイビルジョーがいた。

「（…… ああ、今度こそ喰われるのか。）」

一瞬そんな事が頭に浮かんだその瞬間、電撃弾が二発同時にイビルジョーの頭に着弾する。迸る雷に目を瞑れば上に押し掛かってたイビルジョーは怯み、よろめいたらしくいつの間にかその弾みで外された足による重圧から解放されていた。

解放されてからもすぐには動けず、グレイスは横たわったままその様子をただ見ていたがイビルジョーへとこやし玉が投げつけられたのを見てやっと「追わねば。」という思考が戻ってきた。身体を動かせば全身が酷い痛みを伴ったがとりあえず立たなければ、と漸く膝を付くと駆け寄ってくる人の気配がした。

「グレイス！大丈夫？」

最初に傍に來たのは厭魅だった。大丈夫だと頷くと肩を貸してくれたのでふらつきながらもやっと両足で立つ。よく見てみるとリリイとヨダカはイビルジョーがこのエリアから消える最後の最後まで応戦していた。動けないグレイスに対するおとり、とも言うのかもしれないが。

イビルジョーが完全にこのエリアから姿を消したことを確認し、応戦していた二人が走ってこちらへ向かってくる。グレイスはリリイのゴールドナシリーズとヨダカのシルバーソルシリーズの眩しさに眩しそうに目を細めた。

「ちょっとグレイス、かなりモロに喰らってたけど大丈夫？」

「グレイス…。」

口々にそう言われたが少しぎこちない笑顔で「大丈夫だ。」と返しておいた。ちゃんとしたヘルムもしていないのに外傷が少ないのは奇跡的だったのかもしれない。刺すような痛みは全く取れないので数本の骨に罅くらいは入っていたかもしれないが。

その後少しの時間そこへ留まり、それぞれが得物を研いだり足りないものを補う合成をしたりとイビルジョーとの続きへ備えて準備をしていた。

当のグレイスは秘薬を飲み終え、得物を研いでいた。グレイス自身は「回復薬だけで大丈夫だ。」と言い張ったのだが三人から「いや秘薬にしろ。」と咎めるような視線を浴び続け、ついに堪え切れなくなったグレイスが折れて秘薬を飲んだのだ。回復薬も秘薬も即行性なのですぐに痛みが引いてくる。完全に痛みが取れたとまでは

いかなくとも今はこれで十分だった。ある程度準備が整ったところでグレイスが立ちあがる。

「よし、痛みも引いたし行くか。」

「大丈夫なの？本当に。」

「俺は回復薬で大丈夫だって言ったのに秘薬飲ませたのはお前たちだぞ？大丈夫だって。」

「まーたぶっ飛ばされないでよー？」

「されないって！」

軽口も叩ける程余裕が出てきたグレイスを見てリリィと厭魅は茶化しながらも安堵の息を吐いたようだった。いつもは何か言ってくるヨダカが黙っているのに気付いて不思議に思ったグレイスはヨダカへと目を向ける。

そこには、島へ着く前と同じ様に目で訴えかけてくるヨダカがいた。彼女が何を言いたかったのなんて事はもう分かっていたが、だからこそいつものように手を伸ばしヘルムを被っているままだったがその頭を掴みぐらぐらと揺らしながら（彼はそれを撫でていると言うのだろうか）豪快に笑いながら言った。

「大丈夫、死なないから。」

その返事に彼女が訴えかけていた何かが入っていないことは、言った本人が知っていた。しかしグレイスにはそれ以上の返事など、今は思いつかなかったのだ。

あれから数十分後。時間が経ち少し薄れたペイントボールの臭いを嗅ぎつけ、四人はイビルジョーのいるエリアにそれぞれ身を隠していた。腹が減りやすいイビルジョーはさっきの戦いでまた空腹になったのか今度もまたアプトノスの肉を食んでいる。

基本的に大型モンスターを狩猟するためのパーティーは四人で行く場合前衛型、後衛型の2人ずつが好ましいと言われているが今回のパーティーは前衛で戦えるメンバーはグレイスしかいなかった。

言ってしまうえば前衛型のメンバーがいなくてもガンナーだけで勝てることは勝てる。ただその場合は戦い方の容量も少し違ってくるし持っていくアイテムも多少は変わるのだ。

作戦という作戦があるという訳ではないが、皆は今それぞれの場所に身を隠していた。弓を使うリリィは中距離に待機、ライトボウガンを使うヨダカと厭魅は遠距離に、太刀を使うグレイスは気付かれぬ限りできるだけ近くに身を潜めている。分かれる前に一つ、厭魅が「私たちが電撃弾を撃ちこんだ時が攻撃を開始する合図だ。」と、ただそれだけを確認していた。

イビルジョーが肉を食む咀嚼音だけが響くその場所で一人、グレイスは思考を巡らせていた。

「（今度こそさっきのような失敗はしない、死ぬことはあってはならない。死のうなどと思っではいけない。こんな奴に、こんな奴に喰い殺されてたまるか。俺の仲間も二度と失わない。今度こそ絶対に。」

そんな言葉の短片がぐるぐると頭の中を駆け巡っていたが、同時に鳴る二発の発射音と着弾音がグレイスを現実に戻す。どうやら攻撃が始まったようで少し離れた所からもリリィが弓を立て続けに射っているのが見えた。

食事を邪魔されたイビルジョーが三人に気付き、ぐると身体の向きを変えたと同時にグレイスが身を隠していた場所から走りだす。まだ気付かれていない。足元まで転がり込んだグレイスは最初に傷付け未だに血を流すその傷跡に向け思いきり太刀を振うと、傷口から鮮血が勢いよく吹き出した。イビルジョーがその痛みに悲鳴を上げたが、それに構うことなく続けて二、三度斬りつける。

そのまま続けて斬りつけようとした瞬間、はっとグレイスは直感的に後ろへ飛び退いた。すると左足の踵が地面についたと同時に目の前をイビルジョーの恐ろしく太い尾が風を切って通りすぎる。さっき喰らったのも恐らくこれだろうということが想像できた。

三人の近くに奴を寄せないようになるとなるべく彼女たちがいると

ころから離れ応戦する。とてつもなく大きなその巨体と目の前で対峙するのはグレイスだけで、ヘルムも無く戦うその姿は傍から見れば無謀に見えた。

だが逆に言えば視界が180度よく見えるので相手の攻撃を避けやすいという利点もある。その証拠に致命的となる攻撃は最初に受けたものの以外のほとんどをかわしていた。

猛烈に続く攻撃に業を煮やしたイビルジョーはついに怒りの咆哮をあげる。その筋肉は隆起し、昔受けたのであろう古傷が目に見えた。と同時に天を仰ぐ動作が見え、グレイスは武器をしまいながらも力の限り走りイビルジョーの傍から離れた。それを見た三人も出来るだけ遠くへと走り出す。

走りながらグレイスは肩越しにイビルジョーを見るとそのおぞましい口から黒い炎のような、霧状のような何かを吐き出しているのが見えた。ただでさえ攻撃力は他のモンスターと比べても並外れているという奴の攻撃の中でも一番恐ろしいとされる「ブレス」である。

ブレスを吐き散らしたその後イビルジョーは逃げては攻撃する四人を追いながら暴れまわっていたが、突然ぴたりと立ち尽くし荒い息を吐き始めた。口の端からは唾液がだらだらと流れている。それは大型モンスター特有の疲れている証拠だった。

この隙を見逃すまいとグレイスはすぐさまあらかじめ作ってきておいたシビレ生肉をイビルジョーの目の前に置きすぐその場から離れる。案の定イビルジョーはそれに気付き近寄ってきたかと思うと無我夢中で食べ始めた。攻撃力、大きさ、タフさと他のモンスターと比べるとかなり戦いづらいイビルジョーだが、唯一ある弱点がこの「腹が減りやすい」ことだった。

食べ終わり満足したイビルジョーがハンター達への攻撃を再開しようところを向こうとした時、自らの異変に気付いたのか困惑の呻き声をあげる。既にイビルジョーの身体はまともに動けなくなってきたようだった。このチャンスを四人が逃すはずが無く、ガ

ンナーの三人は動けなくなったイビルジョーへと集中砲火し、唯一の前衛であるグレイスは力の限りその刃に様々な思いを乗せ巨体へと太刀を振う。

斬る、撃つ、爆ぜる、飛び散る。暫くの間辺りにはその音のみが響き渡っていた。

グレイスが太刀を振り続ける腕を上げるのも億劫になってきた頃、今までまともに動く事もできなかったイビルジョーがゆっくりと立ち上がる。怒り時へと備え距離を取ろうとしたその時、何の前触れも無くイビルジョーはグレイスに向け突進してきた。

まるで最期の足掻きとでも言うように、グレイスを目掛けながらも唾液は撒き散らしたままで目の焦点すらもはや合っていないかった。

その一瞬の間、予想外の行動に驚きながらもグレイスは「避けるか避けまいか」という思考より「断つか断たれるか」という事を考えていた。この距離で避けるのはまず無理だと思った上に、自分自身も太刀を振う力がほとんど残されていなかったからだ。

筋肉が隆起し更に大きさを増した巨体に接触するかしないかというその距離でグレイスは太刀を縦に、斜めに低く構え、狂ったように大股で向かってくるイビルジョーの足の間へ向けて思いきり転がり込んだ。

肉を裂いた音が聞こえたのと同時に後ろから耳を塞ぎなくなる程大きく耳障りな咆哮が聞こえる。次いでドスン…という重い音と地響きが聞こえ、しんと静かになった。

グレイスは荒い息もそのままに片膝を付き、剣を斜めに立てた構えの姿から暫くそのまま立ち上がれないでいた。情けないことに、今の行動でほとんどの体力を使い果たしてしまっていたからだ。やっとの思いで太刀を下ろし、ゆっくり立ち上がってから後ろを振り返ると、そこには黒緑の巨体が血を流しぴくりとも動かずに横たわっていた。

その様子を呆然と眺めているとリリイ、厭魅、ヨダカの三人が駆

け寄ってくる姿が見えた。

「何ぼーっとしてんの？ほら素材。」

「…あ、ああ。」

言われてやっと思いついた、とでも言うかのようにグレイスは他の皆と同じように緩慢な動きで腰の剥ぎ取り用ナイフを取り出し、その巨体へと刀身を滑らせ手際良く素材を剥いでいく。

剥ぎ取りを終えた後も、皆がギルドの迎えが来るのをくつろいで待っている中で一人。何かを思いつめるようにイビルジョーの死骸を、ギルドが迎えが来るまでずっと見つめていた。

村へと帰り皆と別れた後グレイスは負った傷に自分で包帯を巻きながら家のベッドの上で今日の事を考えていた。一通り自分でできる治療を終え、ベッドに横たわると微かに軋む音が響く。

三人は自分の様子がいつもと違い何処かおかしいことにはきつと気付いていたのだろうが、あえて何を言う事はなかった。ただ、それを分かっていたながらもいつも通りに接してくれていたことに後から気づき「一番年上なのは俺なのに、情けない。」と一人苦笑する。

「…今度、何か奢ってやらないとな。」

呟きながら顔を片腕で覆う。まだ癒え始めてもない身体は少し動くだけで鈍い痛みが走ったが、そんな事はもはやどうでもよくなっていた。

「……………」

今まで抱いてきた憎しみと哀しみと怒りをぶつける相手が、思いが、消えた。今までその目標を糧にハンターを続けてきたはずだった。それがこの村でハンターを引き受けた理由でもあった。

『本当にそれだけ？』

頭の中で誰かがそう問いかける。しかしその問いが自分なのかそれとも他の誰からのものなのかということも、その問いの答えを考えるのすらも億劫になっていた。

「……………疲れた。」

掠れた声で一言そう呟き、疲弊した身体を休めるために全身から力を抜く。横を向いた時何かが頬を伝った気がしたが、それが何なのかを知る前に意識は急速に深い眠りへと落ちていった。

(後書き)

一応続きます。多分。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1910u/>

狩る話

2011年6月20日00時26分発行